
流れ星から始まる・・・

三日目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星から始まる・・・

【Nコード】

N0930I

【作者名】

三日目

【あらすじ】

テーマは「流星群」。学校の屋上で見る男女にはその流星群はどのように見えるのか?? 2人の関係はどのように変わっていくのか?? 夏の甘酸っぱい2人の出来事です。

前編 2人の計画と2人の距離

8月11日、午前2時の出来事。

2 - D、桜川稍

同じく2 - D、宮岸歩

彼等2人は犀陵高校の屋上のベンチで微妙な距離を取りながら座っていた。

普段通い慣れてるこの高校も夜中となれば雰囲気全然違って凄く新鮮なのだか、

朝から若干曇り気味だったことも後押しして結構肌寒かった。

「今日、本当に見えるかな？」

心配そうに問い掛けた歩は携帯を開き時刻を確認する。

色が薄く、シャギーを入れてある、男子にしては長めな髪、それに顔が童顔な為、時々女子にも間違えられるのだが、歩はれっきとした男の子だ。

こんな夜中、制服では補導されてしまうので彼の服装はジャージに長Tシャツという簡易な服装だった。

本当はパーカーを羽織っていたのだが、今は彼女、稍が着ている。

そしてその彼女、肩に掛かる程度のショートヘアは夜の暗さで隠れそうな位黒くて控えめなウェーブが掛かっている。

顔は子猫、と言って伝わるかどうか曖昧な所だがとにかく可愛い。クラスの中でも人気が高い紛れも無い美少女だ。

「見えるよ、きっと！」

その稍が満面の笑みで答える。

そもそも、なんでこんな時間にこの場所にいるかというと、先週の稍が見たニュースがきっかけだった。

流星群が来るらしい。

ニュースを見て、という電話がすぐに来た。

ペルセウス座流星群というらしい、毎年同じ時期に出没する定常群というらしい。比較的に見やすいので子供達の自由研究とかにもオススメとか。

流星群を見たことがない歩と稍は興味が湧き、すぐさま作戦を練った。

企画書の題名は『Shooting Star』

流星と名付けられたこの企画書の不始末が、2学期早々に先生から2時間程説教を食らうきっかけとなることをまだ彼等は知らない。

夏休みだというのに学校に2人は集まり、自分達の教室でその企画書に色々必要な事、

主に屋上の合鍵作製、夜中の学校侵入、当日の予定などの作戦とその手順を細かい所まで詳しく、2人で相談しながら決めたことを書き込んだ。

レポート用紙18枚分、小さい子にもわかる図解付きだ。

途中意見の食い違いがあつて喧嘩したため、作るのに4日かった。

そして企画書通りに事を進め、なんの障害もなく完遂して今に至る。

屋上で見ると決めたのは、

「星に抱かれる感じがして良い」、

「高い所で見た方が星に近くて絶対綺麗だから！」と主張する稍の意見が通つたからだ。

「もしかしたら星に手が届くかもよ？」

微笑みながらそんなことを言っていた彼女に少しときめいたのは自分だけの秘密だ。

しかしいざ屋上に行つてみたら微かだが問題が発生した。
確かに見晴らしはいいのだが・・

「少し、寒いかも」

手に息を吹きかけて小さく呟いた。

寒くなると予想が出来なくて、待ち合わせ場所に薄いパジャマとバツクという装備で来た稍に上着を貸したので当然自分の装備が薄くなつたのだが。

しかし、まさかここまで寒くなるとは・・・

軽く身震いをするとな隣で稍が心配そうに声を掛けた。

「大丈夫？ やっぱパーカー返した方がいい？？」

と言いながら上着のチャックを開けて行く稍を引き止める。

「いや、大丈夫だから着てなさい、ってかそのパジャマを見せないで」

気付いてないかもしれないが材質が薄くて少し下着が透けているのだ。

上着を貸した理由の一つだ。直視出来ない。

「て言ってもねえ、借りてる以上こっちにも罪悪感があるのよ」

いや、むしろこっちとしては目のやり場が困るのですつと着て欲しいのだけど。

「本当に大丈夫だから着てて、大体そしたら桜川が寒くなるでしょ？」

「そう・だね、じゃあ」

少し考えてから、上着の半分を羽織り、

「・・・こうしよー！」

残り半分を歩に見せた、入ってこい、という事らしい。それを見て軽いため息をついた。

「桜川、お前いつもそういう事してるから僕と付き合ってるって間違えられるんだよ、そういうのは控えなよ」

「寒いんでしょう？来ないの？」

「いや、だから」

「来ないの??」

「だから、」

「来ないの？」

畳み掛けるように声を重ねられるんですけど・・・
顔を見ると多少怒っていた。

「ふつつか者ですがよろしく願いします」

頭を下げ、お邪魔することにした。だって怒ってんだもん、恥ずかしくても入るしかないでしょ。

彼女の温もりと甘い匂いが少し移っていた。

・って変態かよ、僕は。

「はいどうぞ、狭い所ですがゆっくりして行ってね」

彼女は笑う。

・・・それ僕の上着だよ??

時計をもう一度確認する、午前2時半。

流星群はもうとつくに始まっている時間帯だ、結構明るいので多少雲っていても見えるはずなのだが・

横に視線を長すと、肩に寄り掛かる稍の頭があつた。

慌てて視線を携帯の画面に戻す。

稍の宿を半分借りてから8分経過。

それと同時に二人の会話が途絶えたのも8分を経過した。

前編 2人の計画と2人の距離（後書き）

初投稿です。

至らない点があると思います

がよろしく願います！

この話は3話程度

で終わる短い連載です。

是非、最後まで読んでくだ

さい

中編 Stardust

「ねえ・・・」

稍が声をかけたのはそれから5分ほど経ってからだった。

「えっ！何！？」

寄り掛かる頭は柔らかいし甘い香りが微かに漂ってくる。そんな状況に堪えられず、歩は携帯のアプリを稍からは見えないように角度を調整して気を紛らすためにやっていた。

緊張して返事が若干裏返ってしまっただが・・・
なんとか返事を返せた。

「私はね、歩の事大好きだよ・・・」

「・・・」

無言で携帯を閉じる。

画面には設定が雑なRPGのちょうどボス戦の戦闘画面が映っていたが、閉じる。大事な話らしい、データなら携帯を閉じた時点でスリープされてるはずなので大丈夫だろう。

稍が続ける。

「歩とバカやったり、一緒に先生に怒られたり・・・そんな毎日が凄く楽しかったよ」

「楽しい、でしょ？過去形にしないで」

そんなことでしか反論が出来ない僕。

それは、僕も稍が好きだからだ。

友達としてではなく、たぶん女の子として、
稍も同じだと思う。

中学時代から友達になった僕たちは、2年になった辺りから色々と
暴れ回った。

体育祭中ゲリラで種目に入っていない競技をやるように仕向けたり、

先生とガチンコの追いかっこをしたり、

学祭ではマイクジャックをやったり、

卒業式では人気のない廊下にスプレーカンでみんなで落書きをした
り、

面白そうなことをいっぱい2人で友達を巻き込みながらやってきた。

でも、その稍の様子がおかしくなったのは今年の5月辺りからだ。

「桜川じゃなくて、名前読んで」

最初はそんな辺りから始まった。

6月頃からやたらくつついてくるようになった。

手を繋いで来るようになったし、抱き着かれたりもした。

高校1年辺りから好きだった僕としては嬉しかった。けどなんか違った。

恋人と勘違いされたりしたことも何回があった。

僕は桜川が好きだ。

それは違う。

けど、僕達は恋人なんて生温い関係じゃない筈だ。

僕は思い出させてやらなきゃいけない。

桜川に、僕達の関係を。

僕はその関係を守る為に今まで桜川に告白をしなかった。それなのに、

それなのに、

ちくしょう。お前にだけ楽な思いはさせてやらねえ。

「ねえ、歩・・・」

接近してる分、稍が震えてるのがわかる。

寒さで震えてる訳ではないだろう。

しかし、その初々しい可愛い震えすら自省した歩にとっては苛々する材料になる。さっきまで稍の隣にすることで緊張していたのが嘘のように今は冷静になっている。

やっぱりスイッチが変わると人って変わるものだな、としみじみ思う。つまり今の僕は・・・

（かなり、めっちゃめっちゃ怒っているんだ。）

絶対抜け駆けなんかさせねえぞ！

「歩・・・もしよかったら私の恋人に・・・」

ズバァァン！！！！

デコピンが炸裂した。

「桜川、今の台詞・・・その続きを言つと・・・殺すぞ？」

もはやデコピンとは思えない程の音。

だいぶ手加減はしておいたから大丈夫なはず・

フルパワーで放ったらねずみ位なら殺せそうなくらい威力あるそれは、もはや達人の域に達していた。

当然稍にとつては理解できない。

「!?!?!?!?!」

何も考えることが出来ないのだろう、頭を抱えて、ただバグったようにじたばたする。

そのせいで2人が羽織っていたパーカーがずり落ちた、少し寒い。

「!?!?!?!?!、あ、あああ」

しばらくして正気を取り戻した稍。ちよつと考えてからやつと怒鳴り出す。

「あんた!!何考えてんのよ!?!人が柄でもないしんみりした雰囲気!告白しようとしてんのに!?!ってか何!?!あのデコピンの威力!?!?極めた?!?」

「極めた！」

Vサイン。

「誇らしげに言ってんじゃねえええ！！

最後にあんた何て言った！？殺すぞだああ？テメエを先に殺すぞ！！」

うわあ、口調がバラバラ。まだ混乱してるようだ。

またしばらくして、稍は息を調えて仕切りなおした。

「で？本当にどうゆうつもり？人のせつかくの・・・告・・・白・・・を・・・

」

途中からもじもじしはじめて何も聞こえなかった。

「ていうか、桜川？」

ん？と顔を向けてくる稍に今度は優しく語りかける。

「何年か前に決めた僕達の関係、忘れてるでしょ？？」

「!」

びっくりしたような顔、今やっと思い出したらしい。

・
・
・

苦虫を噛みつぶしたような表情のあと、吹っ切れたように笑い出す。
彼女が見上げた空にはいつの間にか流星群がもう始まっていた。

「そうだよね・・違うよね」

あれは中3の時だったか？一時期、恋人になろうかどうか2人で悩みあったことがある。

恋人同士と勘違いされる僕達が、
ちゃんと関係をはっきりしよう！と言って喧嘩しながら決めた、多分僕達にとって最高の答え。

「ゴメン！今の無しにして！忘れてたよ、私達の関係」

稍が笑う。僕も笑う。

星空の下で・・

「『恋人以上の親友』だったよね私達！」

「やつと思い出したかよ、ばか・・」

恋人になったら今の友情関係が崩れてしまう。

ありきたりの理由だが、2人にはやっぱりこれが大事だった。
んで、この言葉。

『友達以上、恋人未満』という言葉から閃いて作った言葉。

『友達以上、恋人以上』

要するに・・・

「ずっと2人バカやってようって事！！！」

ベンチから腰を上げ、向かい合う。

2人とも笑い合いながら、恋によって崩れてかけてた親友関係を直していく。けなしてみたり、昔を振り返ってまだ爆笑したり。

そんなこんなで気付けば3時過ぎになっていた。

流星の数も減り、 稍は思い出したように手を叩いた。

「あつ！願い事言っの忘れてた！！」

歩の手を繋ぎ、引つ張るように近くのフェンスまで行く。

「何、お願いすんの？」

歩がそう聞くと、ぎゅっと手を握って来た。

「決まってるでしょ？歩も一緒に行くよこれは誓いでもあるんだから」

「・・・わかった」

そんなこと言って、手を握り返す。

「いくよ・・・」

稍が合図を取る。
手を繋ぎながら、

せーので！！

「一生親友でいられますように！！！！！！」

腹の奥から、吠えるような大声。絶対近所の2、3人起きた。

手を握ったまま向かいあつてまた笑い合った。

僕達は誓いを絶対破らない。

微かに稍の目尻に涙が浮かんだことは言わない。自分も浮かんだかもしれないから。

これで、多分2人は一生親友でいられる。

でも、逆に一生恋人にはなれないからだ。

稍はどっち？

親友でいられるからだよね？

そうだよね？

後編 花火から始まる・・・

「よし、じゃあ景気付けに一発面白い事しようか？」

「・・・はい？」

固く握った手を離さないで、流星を見ていた僕達だが、突然に稍はそんな提案を出して来た。

企画書にも書いていない事で、びっくりした。

「なんだよ？面白い事って」

問い掛けると稍は何かを企んだような（いや、実際企んでいるが）笑みを浮かべる。

「ふふ、それはね！」

嬉しそうに歩きだす。最初に座ってたベンチまで、しかし。

僕の腕が伸びきった所で止まった。

「・・・」

しばらく無言で僕の手を引っ張ってきたが、僕は動かない。やがて痺れを切らしたように振り向く。ちょっと怒っていた。

「なんで、歩いてくれないの?？」

「いや、歩きたくないし。てゆうか、手。離したら良いじゃん?？」

「・・・なんでそういう意地悪するかな?？」

睨み顔、恐いです・・・

「いいから行くよ!」

「・・・わかった」

ため息をつき、稍について行く。ベンチに置きっぱなしの鞆が目的だったらしい。

器用に片手で鞆を開ける。
中に入っていたのは・・・

「・・・嘘だろ??」

花火だった。

「どかんと一発かましてやろうよ」

「どかんと一発、って。これ手持ちしかないよ??」

稍のこの学校のスクールバックにぎゅうぎゅうになるほど詰められて、ざっと1000は越える程の大量の花火だが、その中は、打ち上げや噴射、ねずみやロケット・そういった類の花火は無く、全部スタンダードな手持ち花火で固められていた。

「いや、手持ちが1番盛り上げるじゃん、歩とやるの楽しみだったし。だから小学校の時のお年玉叩いて買い込んだよ」

「だから、って。どう考えても買い込んだみすぎでしょ。本当にすごい量だけど、何円分だよ?この花火」

「軽く2万円くらい?」

「馬鹿じゃねえの?!?!?」

本気で怒鳴った。

何考えてんだこいつ・・

金遣いの荒い小学生かよ？友達として不安になるわ！

2万円って・・しかも花火に・・

お年玉、こんなことに使うなよ・・

なんかすごい罪悪感・・後で半額返そう。

「・・さっきの告白事件の時より怒ってない？」

おずおずと稍が尋ねる。

「いや、怒るといっつか、説教。そう、説教を後でします。放課後先生の所に来なさい」

「いつだよ、放課後！？」

なんか分からないけどゴメンー、と軽い調子で謝ってくる稍を無視しつつ、彼女のバックを漁る。いや、本気なら女性のバックを漁るのはマナー違反だけど、中身は花火だけなのだ。
プライバシーも何もあつたもんじゃない。

「本気に手持ちしかないよ、どれくらい終わらせればいいの？この子達」

「え？全部終わらせるけど？」

「無理だよ！！？」

本気にやったら翌日までかかりそうだ。

「大丈夫！気合いでなんとかなるよ！

じゃあ早速１発目・・・って火忘れた！？」

どうやら花火を持つてくるのに精一杯でライターを持つてくることを完璧に忘れてたようだ。

・・・相変わらず可愛いなあ

よほどショックなのか少し暴走気味にライターを捜し出す。鞆を雑に漁りすぎて花火が何本か折れる音が聞こえた。その後に今度はボデイチエツク。パジャマのポケットに手をつ突っ込んだ後、下着の中に隠れてないか探すためにパシャマを脱ぎだそうと・・・

「って待った、待った！！ストップ！！ライターならあるから！あるから！！」

啞然とパジャマ捜査を見学してた歩は、グリーンの下着が見えた頃に慌てて止めに入った。

ジャージの中にある狼の柄が入っているターボライターを取り出し、急いで渡した。

そのターボライターを見た瞬間、稍の動きが止まる。

・・・

・ ・ あれ、なんかしたかな？

若干涙目だったさつきとは打って変わって、今は無表情。
怒ってるわけでも、喜んでるわけでもなく、無表情。

「・・・なんで、歩はライターを持っているの？」

ずい、と無表情のまま近づいてくる。
いや、恐い！恐いから！

「・・・タバコ、吸ってたりしないよね？」

それを言われた瞬間に気付いた。疑われてる！？無表情が怖くて慌
てて必死に弁解に勤める。

「違う！違うから！これには少し事情が」

「どんな事情??」

キスしそうな位置まで顔を寄せてくる。

「ああもう、これだよ！これやろうとしてたんだ！」

乱暴にジャージのポケットからそれを出した。

ポケットに入れてたのでパッケージはくしゃくしゃだが、すぐにその正体が分かった。

「へ？花火？？」

顔を赤くして、視線を逸らす。

・・うあ、めっちゃ恥ずかしい。

コンビニで売っていた100円の線香花火。

2人でやろうと決めてたものだが、稍の花火のスケールが大きすぎて、急にみすばらしくなり、恥ずかしくて出せなかった物だ。

ライターは兄貴から借りた。

稍は大爆笑。

「え、え？何？面白ろ！歩も同じ事考えてたんだ！」

冷やかされると余計恥ずかしくなる。もう触れないで欲しい・・
稍は笑いながら線香花火を引ったくる。

「よし、せっかくだしこいつからやろうぜ！

最初に線香花火やってから、ラストに手持ち花火！どう？」

「普通、逆じゃね？ラストの要素デカすぎだし」

「ええ、最後にド派手なほうがいいに」

「手持ちってド派手か？ってか3本いっぺんに火つけてんじゃねえ！」

「てゆうか歩、手持ち花火は手持ち花火、線香花火は線香花火って分別してるけど、両方とも同じ手持ちってゆう分類の花火だよ？」

「知ってるわ！！大体、お前も線香花火って言ってるじゃねえか！ああ！止めるそれ！線香花火はそうやって遊ぶ物じゃない！」

あろうことか、彼女3本同時に火をつけ、振り回しながら遊んでいる。

当然のことながら即効で火玉が落ちた。

「だからやめろって言っただろ！線香は数少ないんだから、手持ちからやろうぜ」

今夜で何度目かのため息をついたが、何故か僕は笑っていた。
なんだかんだ言いながら2人でのいるのが楽しいんだなあ。やっぱり
が1番好きだわ。友達的な意味で。

あ、そういえばさっきから気になっている事があった。

「いつのまに僕達、手を離したんだっけ？」

稍は指定されて自分の手を見つめる、何秒かして握ってたはずの手
が離れてる事に気付いた。

「えっ！？いつから？」

「多分、だいぶ前から」

ライター探してる辺りかな？手が寒くなって気付いたのはもう少し
後だったけど。

「繋ぐ??？」

稍は笑顔で手を差し出す。

「ん・・・」

僕は返事をする彼女と手を重ねる。

冷たい手だった。

パジャマしか着てないなら当然であるけど・・・けど・・・

（もう一つ気付いたけどこいつ、僕のパーカーなんで脱いでんだよ）

ベンチに視線を移動させると、ぽつんと淋しそうにパーカーが佇んでいた。

「よし、じゃあ再び手でも握った所で、花火やるぞー！」

よく考えたら、手を繋いだらどうやって火を付けんだ？？

そのあとの出来事（前書き）

ずいぶん間空いてすみません><

これがシリーズの最後です

読んでくれてホントありがとうございます

そのあとの出来事

「っ、かれた・・・」

現在午前5時。

あれから1時間くらいぶっ通しで花火をやり続けていた2人、流石に提案者の稍にも疲労の色が隠せない。

大体1000本位消費したと思う。

それ程やったのにまだ鞆の底が見えない、改めて1000本の多さを知った。ってか本気で疲れた。

最初に火を付けた1本目から今まで、ずっと花火から花火への火渡りで繋いだので、ろくに休憩は取ってない。当たり前と言えば当たり前だった。

「後片付け、かあ」

力なく稍さんが呟く。

バケツを持って来るのを忘れたので、当然残骸はそこら辺に散らばっている。

「ビニール袋あるから、これに入れよう」

買ってきた線香花火を入れていたコンビニの袋を差し出す・・・そこ

で間違いに気付いた。

100本も入るわけねえ

線香花火を買った時に貰ったビニール袋では明らかに小さすぎた。よく考えればすぐ分かる事だが、睡眠不足や疲労のせいでそこまで頭が回らない。

路線変更。

残骸は教室のごみ箱に入れることにした。

教室の鍵は開いていたのでそのまま侵入。流石に数が多いので二人で2、3回に分けて花火を捨てていった。

全ての作業が終わり、休憩するために自分の席に着く。

僕は一番後ろ、窓際の隅の方。稍さんはちょうど真ん中あたりだ。

会話することもなく15分程体を休めた所で重たい体を持ち上げた。本当なら眠りたいところだが、ここは学校。

夏休みとはいえそろそろ学校に先生が来る時間帯だ。

学校に侵入した身分としてはあまり見つけたくはない。

軽く寝ている稍さんを起こし教室を出ようと背伸びをする、そんな時にポケットに違和感を感じた。

さっきまで気がつかなかったが、中に何か入っているようだ。

取り出してみるとそれはルーズリーフで作った企画書を折り曲げたものだった。

一応持ってきたが、あまり使わなかったなあ

そう思い自分の机の上に置いて行く、あのちくちくした感触にはどうも耐えられない。

帰りは裏門から出て行くことにする。

万が一人に見つかった対策。裏門は人通りが少ないためだ。

しかし・・・

「稍さん、稍さん！起きて！」

稍さんが寝ているので彼女が門を乗り越えることが出来ない。

此处にくる間も一回として目を開けていない。

壁や窓にぶつかりながら、ふらふらになりながら来た。どんな技術だ。

階段とかすごいはらした・・・

けど流石に此处からは起きなければ乗り越えられないだろう。

揺さぶる。

起きない。

揺さぶる。

起きない。

・頭を殴ってみる。

「何すんだゴラァ！！！」

ぶん殴られた。

痛くて泣きそう・

「・・・」

「しかもまだ寝てるのかよ！！どうゆう寝言と寝相だよ！！」

「・・・うりさい・せつか・・・・いい気分で・寝てらたのに・起きちゃったじゃ・ん」

「まだ寝てんじゃねえか！！目開ける！！」

結局、30分程その場で同じようなやり取りを繰り返した。
裏口とはいえ朝っぱらから怒鳴り声を出しまくってるのに、誰にも見つからなかったのは幸運だった。

「海行こうぜ、海。みんなとか誘ってよ、なあ稍さん」

「なんだそれ・・・もう。ただ水着が見たいだけでしょ??」

「・・・」

「え、冗談で言っただけだったけど!?!もしかして・・・凶星?」

「あ、いや。言われてみたら桜さんの水着見てみたいかも・・・」

「あたしは眼中にないってか!?!?」

水橋桜。Gカップ巨乳っ子ちゃん。

対する稍さん、Bカップ。

「それでも一応努力してんだよ・・・」

「いや、いじけんなよ・・・高校生ならまだ育つだろ。大体、身体が見たくて海誘ったんじゃないっての」

「・・・桜ちゃん目当てじゃないの??」

「違う違う。海でもなんでもいいんだよ。とにかく夏休み遊ぼうぜってこと」

「ん、そっか。いいね」

稍さんはあくびをしながら答えた。

それが直った後も体調崩したりで、結局遊ぶどころか宿題すらまともに終わらなかった。

2人とも宿題は最後にまとめてやるタイプなのでほとんど白紙だったという。

さらに、何の考えもなく置いた計画書が見つかってしまい、登校初日から呼び出しである。

まさか屋上に焦跡が残るなんて思いもしなかった・・・

開放されたのは3時間後。

「ばか、計画書を机の上に残すなんて・・・」

稍が死にそうな声で呟く。

「かたじけねえ・・・しかし、これからドラマが始まる」

「意味わからん、早く帰ろう」

ガラガラつと2・Dの教室を開けるとまだ8人くらいの男女が残って駄弁っていた。

「あれ？下校時間すぎてるよー？」

稍が声を掛けるとこちらを振り向く。

男子5人、女子3人。いつもつるんでいるメンバーだ。
む、桜ちゃんもいる・・・

「敵、発見」

歩がチョップを入れる。

「落ち着け、みんな待っててくれたんだよ」

「え？なんで？」

不思議そうに稍がきよろきよろしてると、歩がお金持ってる？？と聞いてくる。

「これから遊びに行くから！」

「は！？あんまお金持っていないよ！ってかどこ行くの？？」

「決まってるだろ？」

みんなが一斉ににやけだしてスクールバックの中からビニール袋を取り出す。

中には遊び道具、肉、野菜、そして花火。

「バーベキューだよ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0930i/>

流れ星から始まる・・・

2010年10月23日01時54分発行